

氏名	高橋智子
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第162号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉モートン・フェルドマン論 間性 in between-nessという美学—
論文等審査委員	
（論文審査主査）	東京芸術大学 教授（音楽学部） 船山 隆
（論文審査副査）	〃 〃（〃） 片山 千佳子
（〃）	〃 准教授（〃） 大角 欣矢
（〃）	〃 非常勤講師（〃） 戸澤 義夫

（論文内容の要旨）

モートン・フェルドマン Morton Feldman (1926–87) はユダヤ系アメリカ人の作曲家である。「私は自分の作品を次のように考えたいと思っている。：カテゴリー（範疇）の間。時間と空間の間。絵画と音楽の間。音楽の構造とその表面の間。」とフェルドマン自らが語るように、彼の音楽には「～の間に」というあれでもこれでもない Neither nor宙吊りの両面価値的な要素が随所に見られる。本研究では、このようなとらえようのなさをフェルドマンが言うところの「間性 in between-ness」に重ね、これをキーワードにして彼の音楽観とその作品を様々な観点から考察する。いったい彼は何と何の間を行き来していたのだろうか。

本研究ではまず時間論に着目した。なぜなら時間は、あらゆる存在、状況、知覚の基礎をなす最も根源的な要素であるからだ。生きられる時間としての音楽は、様々な時間の様態を提示し、音楽を経験的に考察する際に有益な示唆をもたらすこととなるだろう。特に、約6時間にも及ぶ《String Quartet 2》(1984)を始めとする従来の音楽観と時間の概念を覆すかのような長時間の楽曲を書いたフェルドマンの場合においては、とりわけ音楽的時間についての省察が不可欠である。

第1章は主にジョナサン・D・クレーマー Jonathan D. Kramer の *The Time of Music* を参照し、適宜批判を加えながら近代的な時間概念の成立とその発展の様子と、そこからさらに一段進めて音楽的時間の諸形態についても概説する。本章はこの論文の予備考察として位置付けられる。

第2章は音楽における変化及び反復について考察した。前半で取り上げた初期のピアノ曲2曲（《Variations》(1951) と《Nature Pieces》(1951)）は静的でまばらなテクスチュアの楽曲である。これらの楽曲の時間を「退屈な時間」、「何も起こらない時間」として、また、混沌とした前体系的な時間を「雲の時間」(M.セール)として論じた。この章の後半ではフェルドマンとS.ライヒ(1936–)の反復技法を比較した。ライヒの《Music for Eighteen Musicians》(1976)における反復が、非目的論的な時間の中で音型が規則的に反復される過程を通して1つのまとまった「かたち」を形成するのに対し、フェルドマンの《Crippled Symmetry》(1983)では、同期しない異なる時間の中で繰り返される「かたち」それ自体が時間の中で徐々に崩れて行く。全体の構築へ向かうライヒの反復とは対照的に、フェルドマンの反復は負の方向、つまり崩壊へ向かっているということが明らかになった。

フェルドマンは、抽象的な経験を「かけがえのない唯一物—永続的な思惟を残す統一体」と定義している。第3章は作曲及び記譜、演奏、聴取の観点から「抽象的な経験」を考察した。いずれの場合においても、目の前に現れる音をその都度受け入れ、それについて問い続ける行為それ自体が「抽象的な経

験」の真意なのだということが分かった。

第4章ではフェルドマンの音楽とその思想に関連する二項対立的な要素—音と沈黙、制御と解放、音楽と絵画、アメリカとヨーロッパ—について考察した。フェルドマンはこれらのどちらの極によることなく、その間 <sup>あいだ</sup> in betweenで問い続ける道を選んだ。それは自己と徹底的に向き合うこと、つまり孤独を意味する。

結論では、クレマーが提示する音楽的時間の諸形態—線的 linear／非線的时间 non-linear time、垂直的な時間 vertical time、無時間 timelessness—の用語法とその妥当性を再度検討した。その結果、これらの分類が主に調性の有無に基づいているということから、20世紀以降の調性の無い音楽が全て「非線的」、「垂直」及び「無時間」に分類できてしまうという問題が明らかになった。これまでの考察を踏まえた本研究独自の視点を加えてクレマーの時間論を解釈し直したところ、フェルドマンの音楽的時間を以下4つの時間の相に整理することが出来る。

1. 非線的时间；どこからでも行き来でき、何が起こるのか予測不可能な時間、記憶の混乱をもたらす時間
2. 非目的論的な時間；退屈な時間、何も起こらない時間、雲の時間
3. 垂直な時間；音同士の有機的なつながりや関係性が極力回避された時間、同期しない複数の時間
4. 無時間timeless；滲み出る時間、自滅する時間

西洋音楽を記憶のパラフレーズと見なすフェルドマンは、記憶のメカニズムを逆説的に用いて、記憶を混乱する時間の創出を試みた。それが後期の長時間の楽曲である。また、これは伝統的な音楽観や音楽産業に対する彼の批判精神の表れでもある。

#### (総合審査結果の要旨)

申請者は卒業論文と修士論文でアメリカ実験音楽を研究したのち、今回はモートン・フェルドマンに考察の視点を定めている。アメリカ実験音楽に関しては、とくにJ. ケージが中心的な存在として論じられることが多いが、申請者は今回は、図形楽譜から長大な持続の音楽までを作曲しているフェルドマンに光を当てている。この申請者のテーマの選び方は十分に説得力をもつものと言える。

申請者の考察の方法は図形楽譜とか偶然性の音楽とかという過去の見方ではなく、何よりもまず音楽的時間の諸形態の実現者としてフェルドマンを定義づけることである。第1章の「音楽的時間の諸形態」では、線的时间とか、非線的时间とか、垂直な時間とか、無時間といった時間論が論じられ、モメント時間とモビール時間という用語も用いられている。これはこの多様な時間論は主にクレマーの *Time of Music* に由来するものであり、無時間性、時間性、瞬間性などさまざまな概念が乱立して、本来の音楽的時間論としてまとまりに欠けている。

しかし第2章の「繰り返される時間—フェルドマンの反復技法」は、本論中で最も重要な部分であり、「退屈な時間」「何も起こらない空（から）の時間」「不変による不安、そして変化へ」「雲の時間」「フェルドマンの反復技法におけるミニマリスト／非ミニマリスト的側面」など、鋭い議論が展開されている。たしかにこのような考察からフェルドマンとライヒの反復技法の差異というものは明らかになっている。しかしながら、申請者はフェルドマンの音楽思想にあまりにも深く入っているため、フェルドマン自身の音楽の考察から抜け出せないという矛盾に陥っている。

「間性」の問題が論じられるのは第4章で、「あいだ」と「ま」の問題提起から始まり、「あれでもないこれでもない」というさまざまな間（あいだ）の問題、音楽と絵画の間の問題など、さまざまな inbetween-nessの本質を明らかにしようとしている。しかしその「間性」という問題自体が多義性を含み、論理的な追究の要からすり抜けてしまうという矛盾に最後までつきまわっている。しかし、このモートン・フェルドマンという作曲家を対象にしてその美学を深く掘り下げた努力は高く評価できる。